

# フランス語の条件法とロマンス諸語における対応形式の対照研究

2023年4月15日 (於青山学院大学)  
日本フランス語学会第342回例会  
渡邊淳也 (東京大学)

## 1. はじめに<sup>1</sup>

この発表は、フランス語の条件法現在形・条件法過去形と、フランス語以外のおもなロマンス諸語においてそれらに対応する形式についての対照研究である。フランス語、イタリア語、スペイン語、ポルトガル語、ブラジルポルトガル語、ルーマニア語、英語のパラレルコーパスを用いて対応関係を観察するとともに、その結果に対する分析を行なう。

2節で、本発表で扱う各言語の形式を提示する。3節ではコーパス調査の結果を示す。4節ではフランス語の条件法現在形とロマンス諸語における対応形式について、5節ではフランス語の条件法過去形とロマンス諸語における対応形式について、コーパスから採取された例文に即して検討する。

## 2. 本発表で扱う形式

### 2.1. 条件法現在形 (conditionnel présent)

フランス語、イタリア語、スペイン語、ポルトガル語では、条件法現在形はつぎのような形態になっている (フランス語のみ主語代名詞が接語なのでカッコに入れて示している)。イタリア語では条件法単純形 (condizionale semplice)、ポルトガル語でも条件法単純形 (condicional simples) とよばれるのに対し、スペイン語では、条件法単純形 (condicional simple) という名称とならんで、過去未来形 (pos-pretérito) という名称があるが、本発表では比較を容易にするため、統一的に「条件法現在形」とよぶことにする。

・フランス語 chanter の条件法現在形 : (je) chanterais, (tu) chanterais, (il) chanterait, (nous) chanterions, (vous) chanteriez, (ils) chanteraient

- ・イタリア語 cantare の条件法現在形 : canterei, canteresti, canterebbe, canteremmo, cantereste, canterebbero.
- ・スペイン語 cantar の条件法現在形: cantaría, cantarías, cantaríamos, cantaríais, cantarían.
- ・ポルトガル語 cantar の条件法現在形: cantaria, cantarias, cantaríamos, cantaríeis, cantariam.

フランス語、スペイン語、ポルトガル語の条件法現在形はいずれも、後期ラテン語に存在していた迂言形「不定法 + habere の直説法半過去形」(cantare habebam) の総合化 (synthétisation) に由来し、イタリア語のみは「不定法 + habere の直説法単純過去形」(cantare habui) の総合化に由来する (ただし、イタリア語でも方言によっては cantare habebam に由来する形もあり、さらにはラテン語の直説法大過去形 cantaveram に由来する形もある<sup>2</sup>)。

一方、ルーマニア語の条件法現在形は、<avea (ラテン語 habere に由来) の特殊活用 + 不定法> という迂言的な形式である。活用の例を示すと、つぎのようになる。

- ・ルーマニア語 cânta の条件法現在形 : aş cânta, ai cânta, ar cânta, am cânta, ați cânta, ar cânta.

### 2.2. 条件法過去形 (conditionnel passé)

条件法過去形は、いずれの言語でも、条件法現在形に対応する複合時制であり、つぎのような形態になっている。複合形を形成する際、用いられる助動詞が言語によってことなる。イタリア語では条件法複合形 (condizionale composto)、ポルトガル語でも条件法複合形 (condicional composto) とよばれるのに対して、スペイン語では、条件法複合形 (condicional compuesto) という名称とならんで、過去未来完了形 (pos-pretérito perfecto) という名称があるが、本発表では統一的に「条件法過去形」とよぶ。

・フランス語 chanter の条件法過去形 <avoir または être の条件法現在形 + 過去分詞> : (j') aurais chanté, (tu) aurais chanté, (il) aurait chanté, (nous) aurions chanté, (vous) auriez chanté, (ils) auraient chanté.

- ・イタリア語 cantare の条件法過去形 <avere または essere の条件法現在形 + 過去分詞> : avrei cantato,

<sup>1</sup> 本発表は、科学研究費 (JSPS Kakenhi) 基盤研究 (B) JP-18H00667 (研究代表者: 山村ひろみ)、同 (C) JP-22K00615 (研究代表者: 和田尚明)、ならびに同 (C) JP-20K00565 (研究代表者: 渡邊淳也) の助成をうけて遂行された研究の成果の一部である。

<sup>2</sup> イタリア語の諸方言における条件法の形態のちがいについては、つとに Rohlfs (1968, vol. 2, pp.339-349) で詳説されている。

avresti cantato, avrebbe cantato, avremmo cantato, avresse cantato, avrebbero cantato.

- ・スペイン語 cantar の条件法過去形 <haber の条件法現在形+過去分詞> : había cantado, habías cantado, había cantado, habíamos cantado, habíais cantado, habían cantado
- ・ポルトガル語 cantar の条件法過去形 <ter の条件法単純形+過去分詞> : teria cantado, terias cantado, teria cantado, teríamos cantado, teríeis cantado, teriam cantado.
- ・ルーマニア語 cânta の条件法過去形 <avea の特殊活用+fi+過去分詞> : aş fi cântat, ai fi cântat, ar fi cântat, am fi cântat, ați fi cântat, ar fi cântat.

### 2.3. その他の形式

以下では、フランス語以外のロマンス諸語の、条件法現在形、条件法過去形以外の形式のうち、調査範囲で実例が出てきたもののみを概観する (したがって、以下の提示は網羅的なリストではない)。

#### 2.3.1. イタリア語

イタリア語では、調査範囲につきのような形式がみられた。

- ・現在形 (presente) : フランス語と同様、人称語尾のみで示される。canto, canti, canta, cantamo, cantate, cantano.
- ・近過去形 (passato prossimo) : <avere または essere の現在形+過去分詞>。フランス語の複合過去形に相当するので、本発表では複合過去形とよぶ。ho cantato, hai cantato, ha cantato, abbiamo cantato, avete cantato, hanno cantato.
- ・遠過去形 (passato remoto) : 本発表では単純過去形とよぶ。cantai, cantasti, cantò, cantammo, cantaste, cantarono
- ・半過去形 (imperfetto) : cantavo, cantavi, cantava, cantavamo, cantavate, cantavano
- ・大過去形 (trapassato prossimo) : <avere または essere の半過去形+過去分詞>。avevo cantato, avevi cantato, aveva cantato, avevamo cantato, avevate cantato, avevano cantato
- ・単純未来形 (futuro semplice) : canterò, canterai, canterà, canteremo, canterete, canteranno
- ・接続法現在形 (congiuntivo presente) : canti, canti, canti, cantiamo, cantiate, cantino.
- ・接続法半過去形 (congiuntivo imperfetto) : cantassi, cantassi, cantasse, cantassimo, cantaste, cantassero.
- ・接続法大過去形 (congiuntivo trapassato) : <avere または essere の接続法半過去形+過去分詞>。avessi cantato, avessi cantato, avesse cantato, avessimo cantato, aveste cantato, avessero cantato.

#### 2.3.2. スペイン語

スペイン語では、調査範囲につきのような形式がみられた。

- ・現在形 (presente) : フランス語と同様、人称語尾のみで示される。canto, cantas, canta, cantamos, caitáis, cantan.
- ・完了過去形 (pretérito perfecto) : フランス語の単純過去形に相当するが、使用頻度は高い (言説ジャンルを問わず、話しことばでも使う)。日本におけるスペイン語学では「点過去」ともいう。本発表では単純過去形とよぶ。canté, cantaste, cantó, cantamos, cantasteis, cantaron.
- ・未完了過去形 (pretérito imperfecto) : 日本におけるスペイン語学では「線過去」ともいう。cantaba, cantabas, cantaba, cantábamos, cantabais, cantaban.
- ・単純未来形 (futuro simple) : cantaré, cantarás, cantará, cantaremos, cantaréis, cantarán
- ・迂言的未来形 (futuro perifrástico) : <ir + a +不定法>。voy a cantar, vas a cantar, va a cantar, vamos a cantar, vais a cantar, van a cantar.
- ・接続法現在形 (presente de subjuntivo) : cante, cantes, cante, cantemos, cantéis, canten.
- ・接続法完了過去形 (pretérito perfecto de subjuntivo) : <haber の接続法現在形+過去分詞>。本発表では接続法過去形とよぶ。haya cantado, hayas cantado, haya cantado, hayamos cantado, hayáis cantado, hayan cantado.
- ・接続法未完了過去形 (pretérito imperfecto de subjuntivo) : ra 形と se 形のふたつがある<sup>3</sup>。ra 形 : cantara,

<sup>3</sup> スペイン語の接続法未完了過去形 ra 形と se 形はそれぞれラテン語の直説法大過去形ならびに接続法大過去形に由来する。ラテン語の直説法大過去形はポルトガル語の直説法大過去形 (単純形) の源泉となり、ラテン語の接続

cantaras, cantara, cantáramos, cantarais, cantaran ; se 形 : cantase, cantases, cantase, cantássemos, cantaseis, cantasen. フランス語の接続法半過去形と形態が類似しているのは後者である。本発表ではいずれも接続法半過去形とよぶ。

・接続法大過去形 (pretérito pluscuamperfecto de subjuntivo) : < haber の接続法半過去形 + 過去分詞 >。  
ra 形 : hubiera cantado, hubieras cantado, hubiera cantado, hubiéramos cantado, hubierais cantado, hubieran cantado ; se 形 : hubiese cantado, hubieses cantado, hubiese cantado, hubiésemos cantado, hubieseis cantado, hubiesen cantado.

### 2.3.3. ポルトガル語

本研究のコーパス調査では (ポルトガルの) ポルトガル語とブラジルポルトガル語を別にしてはいるが、好んで用いられる形式がことなるだけで、時制・叙法の体系がことなるわけではない。調査範囲につきのような形式がみられた。

・現在形 (presente) : フランス語と同様、人称語尾のみで示される。canto, cantas, canta, cantamos, cantais, cantam.

・単純完了過去形 (pretérito perfeito simples) : cantei, cantaste, cantou, cantámos, cantastes, cantaram.

・複合完了過去形 (pretérito perfeito composto) : < ter の現在形 + 過去分詞 >。tenho cantado, tens cantado, tem cantado, temos cantado, tendes cantado, têm cantado.

・未完了過去形 (pretérito imperfeito) : 本発表では半過去形という。amava, amavas, amava, amávamos, amáveis, amavam.

・大過去形 (pretérito mais que perfeito) : 語尾屈折のみからなる単純形 (ポルトガル語独特)<sup>4</sup> と、< ter または haver<sup>5</sup> の半過去形 + 過去分詞 > からなる複合形の両方がある。本研究のコーパス調査では単純形、複合形 (さらには複合形のなかで助動詞に ter を用いるか、haver を用いるか) を区別しないが、実際にはこまかなニュアンスの違いがある。詳細は Gibo (2017) を参照。単純形 : cantara, cantaras, cantara, cantáramos, cantáreis, cantaram. 複合形 : tinha cantado, tinhas cantado, tinha cantado, tínhamos cantado, tínheis cantado, tinham cantado ; havia cantado, havias cantado, havia cantado, havíamos cantado, havíeis cantado, haviam cantado.

・迂言的未来形 (futuro perifrástico) : < ir + 不定法 >。ポルトガル語の迂言的未来形は、あとでみるように、ir の時制・叙法がきわめて自由であるという特徴がある。vou cantar, vais cantar, vai cantar, vamos cantar, ides cantar, vão cantar.

・接続法現在形 (presente do subjuntivo) : cante, cantes, cante, cantemos, canteis, cantem.

・接続法完了過去形 (pretérito perfeito do subjuntivo) : < ter の接続法現在形 + 過去分詞 >。本発表では接続法過去形とよぶ。tenha cantado, tenhas cantado, tenha cantado, tenhamos cantado, tenhais cantado, tenham cantado.

・接続法未完了過去形 (pretérito imperfeito do subjuntivo) : 本発表では接続法半過去形とよぶ。cantasse, cantasses, cantasse, cantássemos, cantásseis, cantassem.

・人称不定法現在形 (presente do infinitivo pessoal) : 本発表では原則として定形動詞のみを比較対象として扱うが、ポルトガル語には < 不定法 + 人称語尾 > からなる人称不定法という形があり、定形と非定形の境界線上に位置する。そのうち現在形は助動詞を用いない単純形である。cantar, cantares, cantar, cantamos, cantardes, cantarem (規則動詞の場合は接続法未来形と同形).

・人称不定法過去形 (pretérito do infinitivo pessoal) : 複合形であり、< ter の人称不定法 + 過去分詞 > からなる。ter cantado, teres cantado, ter cantado, termos cantado, terdes cantado, terem cantado.

---

法大過去形は多くのロマンス語の接続法半過去形、ならびにルーマニア語の大過去形の源泉となった。ハンドアウト末尾の<付録>、ならびに福嶋 (2017) を参照。福嶋 (2017, pp.31-32) によると、「中世スペイン語では ra 形は直説法大過去として機能していたが、15~16 世紀に接続法過去へと移行し、早くから接続法過去であった se 形と並立の状態になった。現在では ra 形のほうが使用頻度が高く、特にラテンアメリカスペイン語ではこの傾向が著しい。また、ra 形のみが可能な用法が存在する。」

<sup>4</sup> ハンドアウト末尾の<付録>を参照。

<sup>5</sup> Bechara (2009, pp.216-218) の « Conjugação composta » の項では、すべての複合時制で助動詞として ter と haver を併記しているが、実際には直説法大過去形、接続法大過去形以外では haver はほとんど使われない。

### 2.3.4. ルーマニア語

ルーマニア語では、調査範囲につきのような形式がみられた。

- ・現在形 (presentul) : フランス語と同様、人称語尾のみで示される。cânt, cânti, cântă, cântăm, cântați, cântă.
- ・過去形 (trecutul) : <avea の現在形 (ただし特殊活用)+過去分詞>。フランス語の複合過去形よりひろく、語りのテキストの基調時制としても用いる (単純過去形はパラダイムとしては存在しているが、現代では廃用)。本発表では複合過去形とよぶ。am cântat, ai cântat, a cântat, am cântat, ați cântat, au cântat.
- ・半過去形 (imperfectul) : cântam, cântai, cânta, cântam, cântați, cântau.
- ・大過去形 (mai mult ca perfectul) : 語尾変化のみで示す単純形。cântasem, cântaseși, cântase, cântaserăm, cântaserăți, cântaseră.

本発表で扱う他のロマンス諸語とちがって、ルーマニア語には単純未来形が存在せず、未来形はすべて迂言的である。

まず、<vrea の現在形 + 不定法>からなる迂言形がある。これを本発表では vrea 型未来形とよぶ。

- ・vrea 型未来形 (viitorul cu auxiliarul a vrea) : voi cânta, vei cânta, va cânta, vom cânta, veți cânta, vor cânta  
ただし、語彙的動詞としての vrea の活用 (vreau, vrei, vrea, vrem, vreți, vor) にくらべて単純化した特殊な活用であることから、実は「完全に分析的な形」ではなく、総合化への一歩をふみだした形であるといえる。

ルーマニア語にはもうひとつ、<avea の現在形+ să 接続法現在>という未来形もある。これを avea 型未来形とよぶ。さらに、avea 形未来形の変種で、avea の活用をすべて o に簡略化した形もある。これを簡略型未来形とよぶ。

- ・avea 型未来形 (viitorul cu auxiliarul a avea) : am să cânt, ai să cânti, are să cânte, avem să cântăm, aveți să cântați, au să cânte
- ・簡略型未来形 (viitorul popular) : o să cânt, o să cânti, o să cânte, o să cântăm, o să cântați, o să cânte
- ・接続法現在形 (conjunctivul prezent) : つねに小辞 să でみちびかれる。să cânt, să cânti, să cânte, să cântăm, să cântați, să cânte.
- ・接続法完了形 (conjunctivul perfect) : <小辞 să+fi+過去分詞>。本発表では接続法過去形とよぶ。să fi cântat, să fi cântat, să fi cântat, să fi cântat, să fi cântat, să fi cântat

### 3. パラレルコーパスにおける調査

科学研究費助成基金 (JSPS Kakenhi) 基盤研究 (C) 課題番号 15K02482 「現代ロマンス諸語におけるテンス・アスペクト体系の対照研究」(研究代表者:山村ひろみ) による共同研究の一環として作成された、ロマンス諸語ならびに英語の各言語約 7 万語のパラレルコーパス<sup>6</sup>において、フランス語で条件法現在形、および条件法過去形が用いられている箇所、他のロマンス諸語でどのような叙法・時制が用いられているかを確認した<sup>7</sup>。その結果は、それぞれ<表 1>、および<表 2>のとおりであった。フランス語の条件法現在形は 181 例あり、それへの 5 言語での対応例は 181×5=905 例、フランス語の条件法現在形は 120 例あり、それへの 5 言語での対応例は 120×5=600 例ある。

<sup>6</sup> コーパスの作成に用いられた原典は、つぎのとおりである。

- ・英語版 (原作) : Agatha Christie, *The Thirteen Problems*, Harper Collins Publishers, 2002.
- ・フランス語版 : Agatha Christie, *Miss Marple au Club de mardi*, Sylvie Durastanti 訳, Éditions de Masque, 2013.
- ・イタリア語版 : Agatha Christie, *Miss Marple e i tredici problemi*, Lydia Lax 訳, Arnold Mondadori Editore, 1981.
- ・スペイン語版 : Agatha Christie, *Miss Marple y trece problemas*, C. Peraire de Molino 訳, Delbolsillo, 2003.
- ・ポルトガル語版 : Agatha Christie, *Os Treze Enigmas*, Maria de Fátima Saint-Aubyn 訳, Edições Asa, 2012.
- ・ブラジルポルトガル語版 : Agatha Christie, *Os Treze Problemas*, Petrucia Finkler 訳, L & PM, 2015.
- ・ルーマニア語版: Agatha Christie, *Treisprezece probleme*, Cristina Mihaela Tripon 訳, București, Editura RAO, 2014.

<sup>7</sup> このコーパスでは英語との対照も可能であるが、本研究では統計化・分析の対象にはしない。

<表 1: フランス語条件法現在形に対応する形式>

百分率は縦方向での集計、黒塗りは体系的欠如。

形式	イタリア語	スペイン語	ポルトガル語	ブラジル ポルトガル語	ルーマニア語
条件法現在形	69 (38.1%)	96 (53.0%)	101 (55.8%)	108 (59.7%)	77 (42.5%)
条件法過去形	29 (16.0%)	0	1 (0.6%)	0	12 (6.6%)
現在形	35 (19.3%)	36 (19.9%)	47 (26.0%)	40 (22.1%)	45 (24.9%)
単純過去形	1 (0.6%)	4 (2.2%)	0	1 (0.6%)	
複合過去形	0	0	0	0	1 (0.6%)
半過去形	18 (9.9%)	9 (5.0%)	10 (5.5%)	3 (1.7%)	9 (5.0%)
大過去形	1 (0.6%)	0	5 (2.8%)	1 (0.6%)	0
単純未来形	4 (2.2%)	15 (8.3%)	0	0	
迂言的未来形		1 (0.6%)	0	4 (2.2%)	
迂言的未来形の 半過去形		0	1 (0.6%)	2 (1.1%)	
迂言的未来形の 条件法現在形			4 (2.2%)	9 (5.0%)	
vrea 型未来形					21 (11.6%)
avea 型未来形					4 (2.2%)
avea 型未来形の半 過去形					1 (0.6%)
簡略型未来形					1 (0.6%)
接続法現在形	2 (1.1%)	2 (1.1%)	4 (2.2%)	4 (2.2%)	7 (3.9%)
接続法半過去形	5 (2.8%)	9 (5.0%)	6 (3.3%)	5 (2.8%)	
接続法大過去形	3 (1.7%)	3 (1.7%)	0	1 (0.6%)	
人称不定法現在 形			2 (1.1%)	1 (0.6%)	
対応部分なし <sup>8</sup>	14 (7.7%)	6 (3.3%)	2 (1.1%)	2 (1.1%)	3 (1.7%)

<表 2: フランス語条件法過去形に対応する形式>

百分率は縦方向での集計、黒塗りは体系的欠如。

形式	イタリア語	スペイン語	ポルトガル語	ブラジル ポルトガル語	ルーマニア語
条件法現在形	4 (3.3%)	0	51 (28.2%)	49 (40.8%)	4 (3.3%)
条件法過去形	47 (26.0%)	9 (7.5%)	13 (10.8%)	22 (18.3%)	64 (53.3%)
現在形	5 (4.2%)	4 (3.3%)	6 (5.0%)	5 (4.2%)	7 (5.8%)
単純過去形	4 (3.3%)	26 (21.7%)	11 (9.2%)	10 (8.3%)	
複合過去形	10 (8.3%)	0	0	0	21 (17.5%)
半過去形	21 (17.5%)	17 (14.2%)	15 (12.5%)	11 (9.2%)	10 (8.1%)
大過去形	7 (5.8%)	4 (3.3%)	5 (4.2%)	7	4 (3.3%)
単純未来形	1 (0.8%)	1 (0.8%)	0	0	
迂言的未来形		0	0	1 (0.8%)	
迂言的未来形の 半過去形		2 (1.6%)	1 (0.8%)	0	
迂言的未来形の 条件法現在形			0	1 (0.8%)	
vrea 型未来形					2 (1.6%)
avea 型未来形の半					1 (0.8%)

<sup>8</sup> 「対応部分なし」と分類したのは、(i) 定形動詞が使われていない場合、(ii) 文構造がまったくことなる訳である場合、(iii) 訳文が抜けている場合、の3つである。

過去形					
接続法現在形	1 (0.8%)	0	0	2 (1.6%)	3 (2.5%)
接続法過去形	0	0	0	2 (1.6%)	1 (0.8%)
接続法半過去形	5 (4.2%)	14 (11.7%)	5 (4.2%)	4 (3.3%)	
接続法大過去形	6 (5.0%)	35 (29.2%)	5 (4.2%)	3 (2.5%)	
人称不定法現在形			2 (1.6%)	0	
人称不定法過去形			1 (0.8%)	0	
対応部分なし <sup>9</sup>	9 (7.5%)	8 (4.4%)	5 (4.2%)	3 (2.5%)	3 (2.5%)

#### 4. フランス語の条件法現在形とロマンス諸語における対応形式

本節ではフランス語の条件法現在形と他の言語の対応時制について、注目にあたいする事例の代表的な例文を観察するとともに、分析を行なう。以下ではフランス語以外のロマンス諸語の対訳がどのような形式になっているかに応じて場合分けしている。

##### 4.1. 条件法現在形に対応する場合

3節の<表1>でみたように、条件法現在形どうしで対応する場合が割合がもっとも多い。この対応が成り立つのは、第1に、現在の事実と反する仮定にもとづく帰結をあらわす場合である。つぎの例文を確認しよう<sup>10</sup>。

- (1) [仏] Je suis sûre que si j'habitais un village, je **serais** [条現] totalement dépourvue d'esprit.  
 [伊] Sono sicura che se vivessi fra queste quattro case, **perderei** [条現] completamente l'ingegno!  
 [西] Estoy segura de que si viviera en un pueblo **sería** [条現] tonta de remate.  
 [葡] Tenho a certeza de que não **seria** [条現] nada esperta, se vivesse numa aldeia.  
 [伯] Tenho certeza de que eu não **teria** [条現] absolutamente nada na cabeça se vivesse num povoado.  
 [羅] Cred că **m-aș plictisi** [条現] îngrozitor dacă aș trăia țară.  
 [英] I'm sure I **shouldn't have** any brains at all if I lived in a village. (#2690)

現在の事実と反する仮定にもとづく帰結をあらわす場合は、仮定節の構成は言語によってことなるものの、帰結節ではひとしく条件法現在形を用いる。

第2に、発話時における語調緩和をあらわす場合も、つぎのように、各言語で条件法現在形を用いる。

- (2) [仏] J'**aimerais** [条現] pouvoir vous offrir différentes suggestions [...]  
 [伊] **Avrei** [条現] voglia di fare molte supposizioni [...]  
 [西] A mí me **gustaría** [条現] hacer mil sugerencias [...]  
 [葡] Bem **gostaria** [条現] de fazer muitas suposições [...]  
 [伯] **Adoraria** [条現] ter uma série de hipóteses [...]  
 [羅] Mi-**ar plăcea** [条現] să am mai multe ipoteze [...]  
 [英] I **would like** to have a lot of guesses [...] (#2549)

<sup>9</sup> 「対応部分なし」と分類したのは、(i) 定形動詞が使われていない場合、(ii) 文構造がまったくことなる訳である場合、(iii) 訳文が抜けている場合、の3つである。

<sup>10</sup> 例文提示では、フランス語、イタリア語、スペイン語、ポルトガルポルトガル語、ブラジルポルトガル語、ルーマニア語を順に [仏]、[伊]、[西]、[葡]、[伯]、[羅] と略する。また、つぎのような時制・叙法の略称を用いる (なお、略称も今回の調査範囲に生起があったもののみ示している)。  
 [現] 直説法現在形、[単過] 直説法単純過去形、[半過] 直説法半過去形、[複過] 直説法複合過去形、[大過] 直説法大過去形、[単未] 直説法単純未来形、[迂未] 迂言的未来形、[迂未半過] 迂言的未来形の半過去形、[迂未条現] 迂言的未来形の条件法現在形、[vrea 未] vrea 型未来形、[avea 未] avea 型未来形、[avea 未半過] avea 型未来形の半過去形、[条現] 条件法現在形、[条過] 条件法過去形、[接現] 接続法現在形、[接過] 接続法過去形、[接半過] 接続法半過去形、[接大過] 接続法大過去形、[不] 不定法、[人不現] 人称不定法現在形、[人不過] 人称不定法過去形。

第3に、間接話法の補足節などにおいて、時制の照応 (concordance des temps) によって、過去時における現在をあらわす時制的用法の場合。つぎの例がそれにあたるが、イタリア語とルーマニア語は例外である。イタリア語では、次節でのべるように、過去時に視点をおくときは条件法過去を用いる。また、ルーマニア語では *că...* 補足節では時制の照応の規則が存在しないため<sup>11</sup>、直接話法の場合と同じ *vrea* 未来形が用いられている。

- (3) [仏] Je l'assurai que nous **prendrions** [条現] les précautions nécessaires, mais d'un geste il me fit taire.  
 [伊] Gli dissi che **avremmo preso** [条過] tutte le precauzioni, ma egli mi interruppe con un cenno.  
 [西] Le dije que **tomaríamos** [条現] toda clase de precauciones, pero no me dejó insistir.  
 [葡] Garanti-lhe que **tomaríamos** [条現] todas as precauções, mas mostrou total indiferença.  
 [伯] Eu lhe disse que **tomaríamos** [条現] todas as precauções, mas ele desconsiderou minhas palavras.  
 [羅] I-am spus că **vom fi** [vrea 未] cât se poate de precauți, dar n-a dat atenție cuvintelor mele.  
 [英] I told him we **would take** all precautions, but he waved my words aside. (#2797)

#### 4.2. 条件法過去形に対応する場合

<表1>でみたように、フランス語の条件法現在形がイタリア語の条件法過去形に対応している事例が29例と、対比するロマンス諸語のなかではもっとも多い。つぎの(13)では、イタリア語のみで条件法過去形が用いられている。

- (4) [仏] Que **ferait** [条現] le destinataire, recevant une lettre de quelqu'un qu'il ne connaît pas, pleine de noms qu'il ne connaît pas non plus ?  
 [伊] Che cosa **avrebbe fatto** [条過] lui, ricevendo una lettera da una persona sconosciuta, piena di nomi sconosciuti?  
 [西] ¿Qué es lo que **haría** [条現] al recibir una carta de alguien desconocido y llena de nombres extraños para él?  
 [葡] Que **faria** [条現] ele, recebendo uma carta de alguém que não conhecia, repleta de nomes que não lhe diziam nada?  
 [伯] O que ele **iria fazer** [迂未条現], recebendo uma carta de alguém que não conhece cheia de nomes desconhecidos?  
 [羅] Ce **putea** [半過] să facă el cu o scrisoare primită de la o persoană pe care nu o cunoștea, încărcată de nume pe care nu le știa?  
 [英] What **would** he **do**, getting a letter from someone he didn't know, full of names he didn't know. (#3029)

その理由は、イタリア語においては、いわゆる時制的用法で、過去時を基準とするときには、条件法現在形を用いることができず、条件法過去形を用いるからである。Squartini (2001, p.451) において、直接話法の(5)aは間接話法の(5)bに対応するとの指摘がなされている(すなわち、フランス語、スペイン語、ポルトガル語とちがって、(5)bでは条件法現在形 *partirei* は使用できない)。

- (5) a. Io dissi a Anna : **Partirò** [未] domani.  
 わたしはアンナに言った。「明日出発するよ。」  
 b. Io dissi a Anna che **sarei partito** [条過] il giorno seguente. (Squartini 2001, p.451)  
 わたしはアンナに、翌日出発すると言った。

イタリア語での条件法過去形の選択は、つぎの例でみられるように、時制的用法であれば独立節でも同様である。

- (6) [仏] Comme il ne la **reverrait** [条現] plus, il n'y avait pas de danger qu'il la reconnaisse.  
 [伊] Lui non l'**avrebbe** mai più **vista** [条過], naturalmente, quindi non rischiavamo che la riconoscesse.

<sup>11</sup> Timoc-Bardy (2013) 参照。

- [西] El no **volvería** [条現] a verla, por supuesto, de modo que no habría forma de que la reconociera .  
 [葡] Ele nunca mais a **veria** [条現], evidentemente, por isso não haveria forma de a reconhecer.  
 [伯] Ele nunca **veria** [条現] ela de novo, é claro, então não tinha por que temer que fosse reconhecê-la.  
 [羅] El n-**ar** mai **fi văzut** [条過]-o niciodată, așa că nu ar fi putut să o recunoască.  
 [英] He'd never **see** her again, of course, so there would be no fear of his recognizing her. (#4456)

イタリア語のつぎに条件法過去形の使用が多かったのがルーマニア語である (12 例)。(6) ではイタリア語とならんでルーマニア語でも条件法過去形が用いられている。しかし、イタリア語とは選択の原理がことなる。Pană Dindelegan (2013, p.53) によると、(7) a のように明示的の仮定がある場合でも、(7) b のように明示的の仮定がない場合でも、達成可能な可能性 (achievable possibility) をあらわすには条件法現在形、達成不可能な可能性 (unachievable possibility) をあらわすには条件法過去形を用いるとのことである。

- (7) a. În cazul acesta, el { **ar fi** [条現] / **ar fi fost** [条過] } vinovatul.  
 それならば、彼が犯人 (だった) のかもしれない。  
 b. Asta { **ar fi** [条現] / **ar fi fost** [条過] } problema. (Pană Dindelegan 2013, p.53)  
 それが問題 (だった) かもしれない。

(6) に関しては、否定文のなかで条件法過去形が用いられているため、「達成不可能」という記述を直接適用できないが、「述べられる事態がすべて既成で、確定していて、もはやいかんともしがたい」と言いかえればよいのではなかろうか (肯定文の場合は逆に、事態はすでに「起きない」ことが確定しているので、そのことを Pană Dindelegan は「達成不可能」と言っていると思われる)<sup>12</sup>。

#### 4.3. 直説法現在形に対応する場合

フランス語以外のロマンス諸語の対訳で直説法現在形が用いられている場合は、pouvoir [(8)]、savoir [(9)]、vouloir、voir などのモダールな動詞が大半を占める。これらの動詞は語彙的にモダリティを標示していると考えられるが、フランス語ではその動詞をさらに条件法におくことによって、モダリティを重層的に示す傾向があるといえる<sup>13</sup>。

- (8) [仏] Qu'y a-t-il, tante Jane? Ne **pourrions**[条現]-nous partager votre gaieté?  
 [伊] Che cosa c'è, zia Jane? **Possiamo** [現] partecipare alla tua ilarità?  
 [西] ¿Qué ocurre, tía Jane? ¿**Podemos** [現] saber de qué te ríes?  
 [葡] Que se passa, tia Jane? Não nos **pode** [現] contar a piada, para rirmos também?  
 [伯] O que está acontecendo, tia Jane? **Pode** [現] nos contar a piada?  
 [羅] Ce s-a întâmplat, mătușă Jane? Ne **poți** [現] împărtăși și nouă de ce râzi?  
 [英] What is the matter, Aunt Jane? **Can't** we share the joke? (#1392)  
 (9) [仏] On tint deux séances, je ne **saurais** [条現] dire dans quelles condition.  
 [伊] Si erano effettuate due sedute, non **so** [現] in quali condizioni.  
 [西] Se celebraron dos sesiones, bajo condiciones que **ignoro** [現].  
 [葡] Tinham-se realizado duas sessões, não **sei** [現] em que condições.  
 [伯] Fizaram duas sessões espíritas, sob que condições eu não **sei** [現] dizer.  
 [羅] Se ținuseră două ședințe de Spiritism — în ce circumstanțe, nu **știu** [現] să vă spun.  
 [英] Two stances were held — under what conditions I **do** not **know**. (#1264)

(8) に関しては、渡邊 (1998)、(2001)、(2004)、(2014 a)、(2019 a) で示したように、フランス語においては条件法が全般に、言説の他者性、異質性をあらわす、ということから説明できる。この例に即して

<sup>12</sup> ただし、(15) のルーマニア語版は、「もう彼女には会わない」ではなく、「1度も会っていない」という意味に訳されているので、厳密には意味がことなる。

<sup>13</sup> Ligara (1995) は文学テキストのフランス語訳で原典より多くモダリティがあらわれる現象を扱い、フランス語のこの傾向を「過剰モダリティ付与」(surmodalisation) とよんでいる。



言うなら、対話者である Jane の潜在的な言説を指し示しながら、その脈略のなかでは冗談をいっしょに楽しむことができるかとたずねているのである。

(9) の *je ne saurais* は特有の語法とされることがあるが、条件法におかれることによって、いっそうのモダリティ付与がなされている<sup>14</sup>。そしてその基底には、やはり条件法が広義での「他者の言説」をあらわすという機能があると考えられる。なぜなら、*je ne saurais* 以下で言及される不可能なことがらは、発話者としては肯定できない異質性を帯びており、そのことが発話者からみた他者性につながっているからである。

ほかに、元来語彙的にモダリティをあらわしていない動詞を条件法においている場合であっても、文全体としてみれば、話者の判断をあらわしている場合が多い。たとえば (10) では、動詞 *incliner* 「傾く」はそれ自体ではモダールではないが、思考動詞 *penser* 「思う」ととも用いられていることから、文全体としては話者の判断をあらわしているといえる。

(10) [仏] *Je ne crois pas que le jeune Lorimer disposait des connaissances nécessaires. J'inclinerais* [条現] *plutôt à penser que Mme Carpenter est la coupable.*

[伊] *Non credo che il giovane Lorimer avesse le cognizioni necessarie. Sono* [現] *incline invece a ritenere che la colpevole sia la signora Carpenter.*

[西] *No creo que el joven Lorimer tuviera los conocimientos necesarios y me siento* [現] *inclinado a creer que la culpable fue la señora Carpenter.*

[葡] *Não creio que o jovem Lorimer tivesse os conhecimentos necessários e inclino-me* [現] *a pensar que Mrs. Carpenter é a parte culpada.*

[伯] *Não acho que o jovem Lorimer tivesse o conhecimento necessário. Estou* [現] *inclinado a acreditar que a sra. Carpenter é a parte culpada.*

[羅] *Nu cred că tânărul Lorimer avea cunoștințele necesare. Înclin* [現] *să cred că doamna Carpenter este cea vinovată.*

[英] *I don't think that young Lorimer had the necessary knowledge. I am inclined to believe that Mrs Carpenter was the guilty party.* (#3981)

つぎの例は、命題内容は話者の判断ではないが、言説の他者性をあらわすというフランス語の条件法の機能がおもて立っている。フランス語のみで条件法現在形が用いられており、ほかでは直説法現在形が用いられている。対話者に判断をゆだねる疑問文であるが、本発表の考え方では、対話者も広い意味での「他者」にあたる。対話者の一連の言説を、潜在的なもの(対話者が言いそうなこと、言いかねないこと)もふくめて想定し、そのなかに命題内容を位置づける機能を条件法がはたしているのである。

(11) [仏] *Sir Henry ! Vous ne voulez pas dire qu'il y en aurait* [条現] *vraiment beaucoup ?*

[伊] *Sir Henry! Non vorrete dire che...* [対応個所なし]

[西] *¡Sir Henry! ¿No querrá usted decir que sí los hay* [現]?

[葡] *Sir Henry! Não nos está a dizer que há* [現], *pois não?*

[伯] *Sir Henry! Não está querendo dizer que existem* [現]?

[羅] *Sir Henry, doar nu vreți să spuneți că sunt* [現] *atât de multe!*

[英] *Sir Henry! You don't mean there are?* (#2712)

なお、先行研究では、命題内容が狭い意味での他者からの伝聞に由来しているのか、発話者の推論に由来しているのかという、現実世界での情報源に応じてことなる扱いをしている場合があるが、本発表ではそのような考えかたはしない。ここで問題にしているのは、条件法がはらむ「ある種の他者性」であり、現実世界でだれが命題内容の源泉になっているかということではない。Dendale (2010) が提案している「受けなおしの条件法」*conditionnel de reprise* (13) と「推量の条件法」*conditionnel conjectural* (12) の区別は結果的な解釈のちがいにすぎず、条件法自体の機能にとっては本質的でないと考えられる。

<sup>14</sup> Vatrican (2015) 参照。

(12) Paul n'est pas là ! **Serait-il** à Paris ?

(Dendale 2010, p.291)

ポールがいない！パリにいるということか？

(13) Paul ne viendra pas. Il **serait** à Paris en ce moment.

(ad loc.)

ポールはこないだろう。いまはパリにいるようだ。

(12) が発話者の推論に由来することはたしかであるが、その「推論」なるものこそが、固有に発話者に属しているのではなく、発話者に外在する一般的な論理の流れであるという意味で、広い意味での他者性をはらんでいる。

#### 4.4. 直説法の過去諸時制に対応する場合

〈表 1〉でみたように、フランス語以外のロマンス諸語の対訳で直説法の過去時制が用いられている場合は、半過去形が群を抜いて多い。

(14) [仏] Je suis prêt à parier que tous les jeunes gens **seraient** [条現] de mon avis.

[伊] Scommetto che ogni giovanotto lo **pensava** [半過].

[西] Apuesto a que todos los jóvenes **pensaban** [半過] así.

[葡] Aposto que todos os jovens **pensavam** [半過] o mesmo.

[伯] Aposto que todos os rapazes jovens **pensavam** [半過] assim.

[羅] Pun rămăşag că toţi tinerii o **vedeau** [半過] aşă.

[英] I bet the young fellows all **thought** so.

(#3713)

(14) ではフランス語のみ補足節中で条件法現在形を用いているのに対し、ほかのロマンス諸語はいずれも直説法半過去形を用いている。どの言語でも主節の動詞は直説法現在形におかれているため、時制の照応によって変化した結果ではない。フランス語以外のロマンス諸語では、発話者が思いえがいた過去の状況を半過去形で示しているのに対して、フランス語ではそれを条件法現在形で示している。フランス語のみ条件法を用いている理由は、*tous les jeunes gens* という第3者の考えを推断して述べているからであろう。前節でみたように、他者性がトリガーになって、条件法の生起をひきおこすことが、他のロマンス語との比較においても、フランス語のきわだった特徴である。

その他の過去時制が出現する例については、逐語的な訳でない場合が多かったので、その一例として、参考までにつぎの例（スペイン語版で直説法単純過去形、イタリア語版で直説法大過去形を使用している）をあげておくにとどめる。

(15) [仏] Il ne **pourrait** [条現] plus voir la différence.

[伊] Ormai **era passato** [大過] troppo tempo.

[西] [...] no **fue** [単過] capaz de precisarlo

[葡] Não lhe **seria** [条現] possível determinar com exactidão o minuto da morte.

[伯] Ele não **teria** [条現] como saber.

[羅] El n-**avea** [半過] cum să-şi dea seama.

[英] He **couldn't** possibly tell.

(#3567)

#### 4.5. 直説法の未来諸時制に対応する場合

本節では、フランス語以外のロマンス諸語の対訳で、迂言的形式をふくむ未来諸時制が用いられている場合について考えてみよう。

まず、単純未来形については、つぎの例のスペイン語版をあげることができる。

(16) [仏] Soit dit en passant, je ne **laverais** [条現] pas Emma Gaunt de tous soupçons.

[伊] Ad ogni modo non **escluderei** [条現] dai sospetti la governante, Emma Gaunt.

[西] A propósito, no **descartaré** [未] a la criada, Emma Gaunt, como sospechosa.

[葡] Já agora, **devo** [現] dizer que não excluo a criada interna, Emma Gaunt, como suspeita.

[伯] A propósito, eu não **excluiria** [条現] a empregada, Emma Gaunt, da lista de suspeitos.

[羅] Că veni vorba, eu n-aș **exclude** [条現]-o din ecuație nici pe servitoare, pe Emma Gaunt.

[英] By the way, I **would not exclude** the housemaid, Emma Gaunt, from suspicion. (#1382)

(16) のスペイン語版では、意思をあらわす形式として単純未来形が用いられている。一方、フランス語版では、述べられていることがらが回避される可能性であることから条件法が用いられている。スペイン語の条件法は、「過去時を基準とする」という意味が堅固であり、フランス語の条件法のように現在時ないし未来時の命題内容についてひろく用いられることはない。

条件法と単純未来形の対立のありかたに関しては、フランス語とスペイン語は対蹠的といつてよいほど大きく違っている。

Squartini (2004) はつぎの (17) のような対話を引用し、フランス語では疑問と条件法、断定と単純未来形が共起していることを指摘するとともに、フランス語の条件法に [+疑念] という特性を付与している。

(17) —Qu'en pensez-vous, **serait** [条現] -il au bureau? —どう思いますか、彼は研究室にいらっしゃいますか。

—Non, il **sera** [未] plutôt chez lui. —いやむしろ、家にいらっしゃいます。 (Schogt 1968, p. 47)

つまり、フランス語の単純未来形と条件法のあいだには、概略的には確信度の差異ともいえるべき、叙法的な対立があるといえる。

一方、同じく Squartini (2004) によると、スペイン語は時制的要因によってふたつの形式を使いわけている。

(18) Ernesto **tendrá** [未] ahora unos cincuenta años. (Cartagena 1999, p. 2959)

エルネストはいま 50 歳くらいだろう。

(19) Ernesto **tendría** [条現] en aquel tiempo unos veinte años. (ad loc.)

エルネストはあのころ 20 歳くらいだったろう。

スペイン語では、モダールな用法においても、現在時について語るには (18) のように単純未来形、過去時について語るには (19) のように条件法を用いる。

フランス語の (17) でみた、疑問文中であるがゆえに条件法におかれるという現象は、スペイン語にはみられず、(20) のように単純未来形を用いる。

(20) Yo decía : ¿**Estará** enfadado conmigo? (Togebly, 1953, p. 127)

わたしは言っていた。「彼はわたしに怒っているのだろうか [単純未来形]。」

そして、スペイン語で疑問文中に過去未来形が出るのは、過去について語っているときに限られる。

(21) は過去時の事態に関する推測を過去未来形で述べている。

(21) ¿Qué **haría** ella a tales horas? (ibidem, p. 128)

あんな時間に彼女は何をしていたのか [過去未来形]。

スペイン語文法で近年一般的に使われている名称に、フランス語の条件法現在形に相当する過去未来形 (pos-pretérito)、条件法過去形に相当する過去未来完了形 (pos-pretérito perfecto) というものがあり、いずれも直説法の時制として扱われている。名称にまで時制的要因の重視があらわれているのである。

つぎに、迂言的未来形について考えてみよう。なかでもとくに目立つのは、ポルトガル語、ブラジルポルトガル語において、迂言的未来形 <ir + 不定法> の ir がおかれる時制・叙法の自由度が高いことであり、とりわけ、ir を条件法現在形におくことができることである。つぎの (22) では、ブラジルポルトガル語で迂言的未来形の条件法現在形が生起している。

- (22) [仏] [...] elles **verraient** [条現] sans aucun doute tout ce qu'elles voulaient voir, et resteraient aveugles à tout le reste.  
 [伊] [...] **avrebbero visto** [条過] quello che desideravano vedere secondo le istruzioni del loro Baedeker restando cieche a tutto il resto.  
 [西] [...] **verían** [条現] lo que quisieran ver, asistidas por sus guías Baedeker, y estarían ciegas a todo lo demás.  
 [葡] Sem dúvida **veriam** [条現] o que desejavam ver, auxiliadas pelo guia Baedeker, e permaneceriam cegas em relação ao restante.  
 [伯] **Iriam** sem dúvida **ver** [迂未条現] apenas o que desejavam ver, sempre contando com a ajuda do guia Baedeker, e ficariam cegas para todo o resto.  
 [羅] Fără îndoială că **urmau** [半過] să viziteze ceea ce doreau să vadă, ajutate de un ghid turistic, și aveau să ignore orice altceva din jurul lor.  
 [英] They **would** doubtless see what they wished to see, assisted by Baedeker, and be blind to everything else. (#2313)

この文にもみられるように、迂言的未来形の条件法現在形が用いられる例は、ほとんど全て、のぞましくない意味の命題内容である。ほかの言語では単なる条件法現在形 (や、条件法過去形) が用いられていることとの対比においても、(22) のブラジルポルトガル語版では、迂言形<ir+不定法>はマイナス評価を示している。マイナス評価を示す<ir+不定法>については、渡邊 (2017 b) で扱ったが、つぎの (23) のような例をあげることができる。

- (23) Como ela **foi cair** da escada ? (Raphael Draccon, *Fios de Prata*, p.43, 渡邊 2017 b, p.237)  
 どうして彼女は階段で落ちてしまったの？

(23) では、「階段で落ちる」という事態に対するマイナス評価を示す<ir+不定法>の ir が単純過去形におかれたものである。ブラジルポルトガル語の<ir+不定法>は、(22) でも「彼女らは自分たちのみただけをみて、ほかのすべてについて目をとぞした」という事態に対するマイナス評価を示している。(22) のブラジルポルトガル語版では、その<ir+不定法>に、推量をあらわす条件法現在形が組みあわさっているものと考えられる。

最後に、ルーマニア語の未来諸時制についてふれておきたい。2.3.4 節で述べたように、ルーマニア語には単純未来形が存在せず、未来形はすべて迂言的である。そして、vrea 型未来形、avea 型未来形、簡略型未来形ともに、(他言語における条件法のように元来過去時基準の形式ではなく) 現在時基準の未来形である。今回の調査では他言語の「未来諸時制」のうち現在時基準のものはイタリア語 4 例、スペイン語 15 例、ポルトガル語 0 例、ブラジルポルトガル語 4 例に対し、ルーマニア語では 26 例と多かった。その理由としては、4.1 節で述べたように、ルーマニア語では補足節における時制の照応の規則が存在しないことが考えられる。

- (24) [仏] Je l'assurai que nous **prendrions** [条現] les précautions nécessaires, mais d'un geste il me fit taire.  
 [伊] Gli dissi che **avremmo preso** [条過] tutte le precauzioni, ma egli mi interruppe con un cenno.  
 [西] Le dije que **tomaríamos** [条現] toda clase de precauciones, pero no me dejé insistir.  
 [葡] Garanti-lhe que **tomaríamos** [条現] todas as precauções, mas mostrou total indiferença.  
 [伯] Eu lhe disse que **tomaríamos** [条現] todas as precauções, mas ele desconsiderou minhas palavras.  
 [羅] I-am spus că **vom fi** [vrea 未] cât se poate de precauți, dar n-a dat atenție cuvintelor mele.  
 [英] I told him we **would take** all precautions, but he waved my words aside. (#2797)

ルーマニア語以外では、いずれも過去時制の主節に応じて時制の照応で変化した形式 (条件法現在形、または条件法過去形) が用いられているが、時制の照応の規則がないルーマニア語では、直接話法の場合と同じ vrea 型未来形が用いられている。

#### 4.6. 接続法に対応する場合

まず、接続法現在形に対応する場合からみてゆこう。

(25) [仏] Il se réunirait chaque semaine et, à tour de rôle, chacun de ses membres proposerait un problème... un mystère dont il aurait eu personnellement connaissance et dont, bien sûr, il **détiendrait** [条現] la solution...

[伊] Dobbiamo riunirci ogni settimana e ogni membro a turno dovrà sottoporre un problema. Qualche caso misterioso di cui è personalmente a conoscenza e di cui naturalmente **ha** [現] la soluzione.

[西] Nos reuniremos cada semana y cada uno de nosotros, por turno, deberá exponer un problema o algún misterio que conozca personalmente y del que, desde luego, **sepa** [接現] la solución.

[葡] Reunimo-nos todas as semanas e cada membro terá de propor um enigma. Um mistério que conheça pessoalmente e para o qual, evidentemente, **conheça** [接現] a solução.

[伯] Vamos nos reunir todas as semanas e cada vez um membro tem de apresentar um problema. Algum mistério sobre o qual tenha conhecimento e para o qual, claro, **saiba** [接現] a resposta.

[羅] Ne vom întâlni în fiecare săptămână și fiecare membru va trebui să propună pe rând câte o problemă. Un mister despre care a auzit și a cărui dezlegare **să** o **cunoască** [接現], firește.

[英] It is to meet every week, and each member in turn has to propound a problem. Some mystery of which they have personal knowledge, and to which, of course, they **know** the answer. (#68)

この例では、いずれの言語でも、関係節のなかで用いる叙法が対比されることになる。そして、スペイン語、ポルトガル語、ブラジルポルトガル語、ルーマニア語で接続法現在形が用いられている。これらの接続法は、探索の対象を指示する先行詞（ここでは、「火曜クラブ」で語られるにあたいする事件）にかかる関係節において、先行詞にもとめられる要件を示す用法であると思われる。フランス語の接続法にも、つぎの (26) のように、一見同様の用法は存在する。

(26) Je cherche quelqu'un qui **puisse** m'aider. (渡邊 2018 a, p.88)

だれか、わたしを手伝うことのできるひとをさがしています。

しかし、(25) のフランス語版では、引用部分冒頭から、se réunirait, proposerait, aurait eu, détiendrait と、4 つの条件法の生起が連続しており、接続法を用いる場合とはことなる方略で談話が構成されている。この場面は、未解決の事件について語り合う「火曜クラブ」の提案という文脈にあるため、(まだ) 現実化していない一連の構想であるということが、4.3 節でふれるところのあった「言説の異質性」に対応している。したがって、実現の可能性にちがいはあるものの、(25) のフランス語版での条件法の用法は、つぎの (27) にみるような「夢の条件法」(conditionnel du rêve ; Togeby 1985 による命名) と均質である。

(27) Nous **construirions** une maison, nous **nous aurions** un garçon et une fille à qui j'**apprendrais** à lire et à écrire. Nous **nous querellerions** à propos de leur éducation. (Togeby 1985, vol.2, p.390)

わたしたちは家を建てて、男の子ひとり、女の子ひとりを生んで、こどもたちにわたしが読み書きを教えるの。  
わたしたちはどきどき、こどもたちの教育のことで言い合いをするの。

第2に、接続法半過去形に対応する例として、つぎのようなものをあげることができる。(37) においては、イタリア語版、スペイン語版、ポルトガル語版、ブラジルポルトガル語版で接続法半過去形が用いられている。

(28) [仏] J'avais espéré que leur attachement n'**irait** [条現] pas jusque-là, car M. Denman était un être violent, pas du tout du genre à témoigner de l'indulgence pour les faiblesses de Mabel [...]

[伊] Avevo sperato che la loro relazione non **approdasse** [接半過] a nulla, perché il signor Denman era un uomo dal carattere collerico... non certo il tipo adatto a sopportare le eccentricità di Mabel.

[西] Yo había esperado que aquella boda no **llegara** [接半過] a celebrarse, porque el tal Denman parecía un

hombre de temperamento violento y no la clase de persona que hubiera sabido tener paciencia con las debilidades de Mabel.

[葡] Eu alimentara a esperança de que aquela relação não **desse** [接半過] em nada, pois Mr. Denman era um homem de temperamento muito violento, não era o tipo de homem que teria paciência para as fraquezas de Mabel [...]

[伯] Eu havia nutrido muitas esperanças de que aquele relacionamento não **fosse** [接半過] dar em nada, pois o sr. Denman era um homem de temperamento violento, não o tipo de homem que teria paciência com as fraquezas de Mabel [...]

[羅] Am sperat ca această legătură **să** nu **ia** [接現] o întorsătură nefericită, deoarece domnul Denman avea un temperament cam violent – nu era genul de bărbat care să aibă răbdare cu toanele lui Mabel –,

[英] I had hoped very much that the attachment **would** not **come** to anything, for Mr Denman was a man of very violent temper – not the kind of man who would be patient with Mabel's foibles – [...] (#1514)

Espérer に類する動詞がみちびく補足節において用いられる叙法は、調査範囲ではフランス語のみ直説法で、ほかのロマンス諸語では接続法である。つぎの (29) にみられるように、フランス語では espérer のあとの補足節では原則として直説法単純未来形を用いる<sup>15</sup> が、(28) においては主節が j'avais espéré と大過去形になっているため、時制の照応によって条件法現在形が用いられている。フランス語で直説法における時制の照応がなされているのと並行して、ほかのロマンス語では接続法における時制の照応の結果、接続法半過去形が用いられている。

(29) [仏] J'espère que vous n'**aurez** [未] jamais envie de vous débarrasser de moi.

[伊] Spero che non vi **venga** [接現] mai in mente di togliermi di mezzo.

[西] Espero que nunca se le **ocurra** [接現] eliminarme.

[葡] Espero que nunca **deseje** [接現] eliminar-me.

[伯] Espero que nunca **deseje** [接現] livrar-se de mim.

[羅] Sper că nu **veți dori** [vrea 未] niciodată să scăpați de mine.

[英] I hope you **will** never **wish** to remove me.

(#2137)

第 3 に、(一部の言語で) 接続法大過去形に対応する場合をみよう。

(30) [仏] Et quand on me **convoquerait** [条現] à la police, rien de plus facile que de dire que je répétais avec ma doublure à l'hôtel.

[伊] E, quando mi **avessero chiamato** [接大過] alla stazione di polizia, non ci voleva niente a dire che ero in albergo a provare la parte con la mia controfigura.

[西] Cuando me **enviaran** [接半過] a comisaría sería lo más sencillo del mundo decir que estaba ensayando mi papel en mi hotel con mi suplente [...]

[葡] E quando me **fossem** [接半過] buscar para ir à esquadra, nada mais fácil do que dizer que estava a ensaiar o meu papel com a substituta.

[伯] E quando **tivessem** me **mandado** [接大過] chamar na delegacia seria a coisa mais fácil do mundo dizer que estava ensaiando minha parte no hotel com minha substituta.

[羅] Dacă m-**ar fi chemat** [条過] la secția de poliție, mi-ar fi fost foarte simplu să declar că îmi exersam rolul împreună cu dublura mea la hotel.

[英] And when they **sent** for me to the police station it's the easiest thing in the world to say I was rehearsing my part with my understudy at the hotel. (#4453)

(30) では、フランス語で条件法現在が用いられているのに対して、イタリア語版、ブラジルポルトガル語版で接続法大過去形が用いられている。また、スペイン語版、ポルトガル語版では接続法半過去形が用いられている。

<sup>15</sup> フランス語では espérer が補足節で直説法を要求する理由については、渡邊 (2018 a, pp.74-75) を参照。

フランス語における *quand* 節では基本的に直説法が用いられる。(39) で条件法現在が用いられている理由は、過去時からみた未来であることから、時制的用法としての使用であり、直説法に準ずるものである。

一方、イタリア語、ポルトガル語の *quando* 節、スペイン語の *Cuando* 節では、従属節の命題内容が未来時に位置づけられるとき、または過去時からみた未来に位置づけられるとき、接続法が用いられる。その際の時制として、(30) のスペイン語版、ポルトガル語版では、「警察に召喚される時」という従属節の事態との同時性に「ホテルで代役と稽古をしていたと説明する」という主節の事態を考えているため、接続法半過去形が用いられている。それに対し、イタリア語版、ブラジルポルトガル語版では、「警察に召喚された、そのあと」というように、従属節の事態を主節の事態からみて完了的にとらえているので、接続法大過去形が用いられている。ふたつの事態がたがいに時間的に近接しているため、同時性によってとらえることも、完了的にとらえることもできると考えられる。

ルーマニア語版では、仮定もあらわすことのできる *dacă* を接続詞として用いており、主節でも条件法過去形を使っている。文全体が仮定（「警察に召喚されたとしたら…」）の色合いをおびることになり、*dacă* 節でも条件法過去形が用いられている。

最後に、スペイン語に限った特徴として、依頼の語調緩和の表現として、つぎの例のように、*querer* の接続法半過去形を用いることがあげられる。

(31) [仏] *J'aimerais* [条現] *savoir si notre hôtesse s'en souvient ou si elle l'ajamais su: quelles ont été les conclusions du médecin légiste ?*

[伊] *Vorrei* [条現] *sapere quale fu il referto medico in base all'inchiesta... sempre che la signora Bantry lo ricordi e ne sia a conoscenza.*

[西] *Quisiera* [接半過] *saber algo sobre el informe médico que se presentó en la encuesta, es decir, si nuestra anfitriona lo recuerda.*

[葡] *Gostaria* [条現] *de saber que dados clínicos foram fornecidos à investigação... isto é, se a nossa anfitriã se recorda, ou, efectivamente, sabe.*

[伯] *Gostaria* [条現] *de saber que evidências médicas foram dadas no inquérito, isto é, se nossa anfitriã se recordar, ou se de fato souber.*

[羅] *Aș vrea* [条現] *să știu ce diagnostic s-a stabilit la anchetă - asta, firește, dacă amabila noastră gazdă își aduce aminte sau dacă știe.*

[英] *I should like* to know what medical evidence was given at the inquest - that is, if our hostess remembers, or, indeed, if she knows. (#3760)

(31) では、スペイン語以外のロマンス諸語（フランス語をふくむ）がいずれも条件法現在形を用いている。スペイン語でも条件法現在形 *querría* を用いることも可能であるが、ここでは接続法半過去形の *-ra* 形である *quisiera* を用いている。これは古語法の名残りといわれるが、2.3.2 節でも述べたように、スペイン語の接続法半過去形には *-ra* 形と *-se* 形のふたつの系列があり、いわば、形態的な資源が豊富であるため、このような使用が可能になっていると考えられる。実際、語調緩和用法は *-ra* 形にかぎられ、*-se* 形 (\**quisiese*) は用いられない。

## 5. フランス語の条件法過去形とロマンス諸語における対応形式

本節ではフランス語の条件法過去形と他の言語の対応時制について、注目にあたいする事例の代表的な例文を観察するとともに、分析を行なう。以下ではフランス語以外のロマンス諸語の対訳がどのような形式になっているかに応じて場合分けしている。

### 5.1. 条件法現在形に対応する場合

フランス語版では条件法過去形を用いているにもかかわらず、ほかのロマンス語で条件法現在形を用いている場合として典型的なのは、フランス語においては条件法過去形にふくまれる助動詞であらわしている完了を、ポルトガル語、ブラジルポルトガル語においては条件法現在形のあとにくる不定法に完了の助動詞をつけることであらわしている場合である。

(32) [仏] J'avoue que j'**aurais dû** [条過] y penser.

[伊] **Avrei dovuto** [条過] arrivarci da solo

[西] Confieso que **debiera** [接半過] haber pensado en esto.

[葡] Reconheço que eu **deveria** [条現] ter pensado isso.

[伯] Confesso que **deveria** [条現] ter pensado nisso.

[羅] Mărturisesc că m-**am gândit** [複過] și eu la acest aspect.

[英] I confess I **ought to** have thought of that.

(#3876)

(32) では、「そのことを考えるべきだった」というぐあいで、命題内容が位置づけられるのは過去時であるものの、その判断がなされているのは発話時である。したがって、フランス語でも、字義的には **je devrais** [条現] y **avoir pensé** としてもよさそうであるが、そのように言うことは稀であり、完了の助動詞を法動詞 **devoir** につける (すなわち、(32) のように条件法過去形を用いる) ことが一般的である。これは条件法の場合にかぎったことではなく、直説法の場合にもみられる現象である。Martinon (1927, p.349) は、つぎのような現象を指摘している。

(33) a. Vous **avez dû** [複過] le rencontrer. (ad loc.) あなたは彼と出会ったに違いありません。

b. Vous **devez** [現] l'avoir rencontré. (ad loc.) あなたは彼と出会ったに違いありません。

(33) a. のように言っても、発話者が命題 < vous - le rencontrer > を確からしいと思っているのは、発話時点においてであり、(33) b. と同様であるという。命題内容と判断の時を字義的にあらわしている (33) b. に対し、(33) a. のように表現することを、Martinon (ad loc.) は「時制の転倒」(interversion des temps) とよび、規範的に好ましくないという意見を述べている。しかしながら、実際の使用では、「転倒」した形式のほうが全般的に多くみられる。(32) のフランス語版も「転倒」した形式であるといえる。これに対して、ポルトガル語版、ブラジルポルトガル語版においては、条件法現在形のあとにくる不定法を、完了の助動詞 **ter** によって複合形にすることによって、字義的な形式を用いているといえる。

## 5.2. 条件法過去形に対応する場合

フランス語以外のロマンス諸語でもフランス語と同様に条件法過去形を用いている場合は、大きくわけてふたつの典型的事例がある<sup>16</sup>。

第1に、過去時の事実と反する仮定に対する帰結をあらわす場合。

(34) [仏] Sans l'homme qui est arrivé avec son bateau, je **me serais noyée** [条過], moi aussi.

[伊] Se non fosse stato per quell'uomo che è arrivato con la barca, credo che **sarei affogata** [条過] anch'io.

[西] De no haber sido por ese hombre que se acercó con el bote, **me hubiera ahogado** [接大過] yo también.

[葡] Se não fosse aquele homem que veio ao nosso encontro de barco, também eu **me teria afogado** [条過].

[伯] Se não fosse por aquele homem ter vindo com o barco, eu **teria me afogado** [条過] também.

[羅] Dacă n-ar fi venit bărbatul acela cu barca, m-**aș fi înecat** [条過] și eu.

[英] If it hadn't been for that man coming out with his boat I **should have been** drowned too.

(#2376)

ここでは、調査範囲ではスペイン語版をのぞくすべてのロマンス諸語で条件法過去形が用いられている。スペイン語版でも **me habría ahogado** と条件法過去形で表現してもよいが、(31) における接続法半過去形とおなじく、古式をとどめる語法である。

第2に、過去時の事態に関する推測を述べる場合。しかしこの場合、調査範囲のロマンス諸語が一致して条件法過去形を用いている例は見あたらず、部分的な対応にとどまった。

(35) [仏] On peut affirmer, sans risque de se tromper, que personne n'**aurait pu** [条過] répondre correctement à la

<sup>16</sup> ただし、条件法現在形の場合は調査対象のすべてのロマンス諸語 (フランス語もふくむ) でそろって条件法現在形を用いている例があったのに対し、条件法過去形に関しては、調査対象のすべてのロマンス諸語でそろって条件法過去形を用いている例は皆無であった。



question.

[伊] Nessuno, sicuramente, **avrebbe indovinato** [条過] la risposta a quella domanda.

[西] Sin embargo, podía afirmar con seguridad que ninguno **había adivinado** [大過] la respuesta a la pregunta.

[葡] No entanto, pode assumir-se com segurança que ninguém **adivinharia** [条現] correctamente a resposta àquela pergunta.

[伯] No entanto, pode-se supor que, seguramente, ninguém **teria adivinhado** [条過] a resposta certa para a pergunta.

[羅] E de la sine înțeles că nimeni nu **putea** [半過] ghici răspunsul la întrebare.

[英] It may be safely assumed, however, that no one **would have guessed** the answer to the question right.

(#1700)

(35) では、ポルトガル語版で条件法現在形が用いられていることが特徴的である。この場合は、他の言語の対訳が条件法過去形によって「その問いの答えに達した者はいない」というように完了的に状況をえがき出しているのに対し、ポルトガル語版では「答えに達しようる者はいない」というように潜在的なとらえかたをしているので条件法現在形になっていると考えられる。

### 5.3. 直説法現在形に対応する場合

フランス語版の条件法過去形が他のロマンス語で直説法現在形に対応する場合は、(36) にみるように、法動詞 (verbe modal) が直説法現在形におかれている場合であった。

(36) [仏] Bien sûr, cela **aurait pu** [条過] être une racine.

[伊] Naturalmente, **può** [現] essere stata una radice .

[西] Desde luego **pudo** [単過] ser la raíz de un árbol.

[葡] **Pode** [現] ter sido uma raiz de árvore, claro.

[伯] É claro que **deve** [現] ter sido a raiz de uma árvore.

[羅] Se **poate** [現] să fi fost o rădăcină de copac.

[英] Of course, it **might have been** a tree root.

(#593)

(36) において、イタリア語では *potere*、ポルトガル語では *poder*、ブラジルポルトガル語では *dever*、ルーマニア語では *putea* という法動詞がそれぞれ現在形におかれており、フランス語においては条件法があらわしていたモダールな意味を法動詞が担っていると考えられる。また、フランス語において条件法過去形という複合時制によって示されていた完了相は、イタリア語では *essere stata*、ポルトガル語およびブラジルポルトガル語では *ter sido* と、法動詞に後続する不定法を複合形 (完了形) におくことによって、またルーマニア語では法動詞に後続する接続法を *să fi fost* と過去形 (複合形) におくことによって標示されている。これらのことから、全体としては翻訳的關係が成り立っているといえる。

### 5.4. 直説法の過去諸時制に対応する場合

<図 2> でみたように、フランス語版の条件法過去形から他のロマンス語での直説法の単純時制への対応関係としては、単純過去形 (ルーマニア語では複合過去形)、半過去形、大過去形への対応がみられた。

まず、単純過去形 (ルーマニア語では複合過去形) に対応する場合からみてゆこう。

(37) [仏] La fille **se serait prise** [条過] pour la prêtresse d'Astarté et d'une façon ou d'une autre, **l'aurait poignardé** [条過].

[伊] La ragazza **si trasformò** [単過] davvero in una sacerdotessa di Astarte, e in qualche modo **pugnò** [単過] Haydon.

[西] La muchacha **se convirtió** [単過] realmente en una sacerdotisa de Astarté y supongo que, de una manera u otra, **debió** [単過] de apuñalarlo.

- [葡] A rapariga **transformou-se** [単過] realmente numa sacerdotisa de Astarte e suponho que, de uma forma ou outra, **acabou** [単過] por apunhalá-lo.
- [伯] A garota realmente **se transformou** [単過] em uma sacerdotisa de Astarte e suponho que, de uma maneira ou outra, o **apunhalou** [単過].
- [羅] Fata chiar **s-a transformat** [複過] în Preoteasa Astarte și bănuiesc că, într-un fel sau altul, a găsit o modalitate de a-l **înjunghia** [不] pe Richard Haymond [: Haydon].
- [英] The girl really **turned** herself into a Priestess of Astarte, and I suppose somehow or other she **must have stabbed** him. (#560)

(37) のフランス語版では、過去時の状況に関する一連の推理が条件法過去形で語られている。4.3 節で述べたように、このような場合、広義での言説の他者性があるため、フランス語では条件法を用いることが特徴的である。(37) ではフランス語版だけが条件法を用いており、他の言語はひとしく単純過去形 (ルーマニア語のみ複合過去形) を用いているが、いずれも、それぞれの言語で、物語においてもっとも基本になる時制である。

つぎに、他のロマンス諸語 (の一部) では直説法半過去形に対応する例。

- (38) [仏] La police **aurait pu** [条過] arriver plus tôt !
- [伊] La polizia **poteva** [半過] arrivare troppo presto.
- [西] La policía **podía** [半過] haber llegado demasiado pronto.
- [葡] A polícia **podia** [半過] ter chegado demasiado cedo.
- [伯] A polícia **poderia** [条現] ter chegado antes da hora.
- [羅] Poliția **ar fi putut** [条過] ajunge mai devreme.
- [英] The police **might have** arrived too soon. (#3557)

(38) は「警察はもっと早く着くこともできたでしょうに」というように、過去に起きなかったできごとをあげて、非難のニュアンスをふくむ文である ([仏]、[伯]、[羅] と [伊]、[西]、[葡] で [英] の too soon の解釈がことなるが、ここでは前者にしたがっておく)。フランス語をふくむすべてのロマンス諸語で、フランス語の *pouvoir* と翻訳的關係にある法動詞が用いられている。イタリア語、スペイン語、ポルトガル語で半過去形が用いられているのは、モダリティの標示を法動詞にゆだね、過去時に「警察がもっと早く着くこと」が可能な状態であったことを示している。ブラジルポルトガル語では条件法現在形が用いられているが、この種の例については 5.1 節でふれた。ルーマニア語ではフランス語と同様の構成になっている。

最後に、他のロマンス諸語では直説法大過去形に対応する例をみよう。

- (39) [仏] La presse évoqua discrètement la tragédie des Canaries, adoptant la théorie selon laquelle le décès de Mlle Durrant **aurait troublé** [条過] la raison de son amie.
- [伊] I giornali fecero delle discrete allusioni, avanzando l'ipotesi che la morte della signorina Durrant **avesse sconvolto** [接大過] il cervello della sua amica...
- [西] Los periódicos hicieron alguna discreta alusión a la tragedia ocurrida en las islas Canarias y expusieron la teoría de que la muerte de la señorita Durrant **había trastornado** [大過] la razón de su amiga.
- [葡] Os jornais faziam uma referência discreta à tragédia ocorrida nas Ilhas Canárias, avançando a teoria de a morte de Miss Durrant **ter afectado** [人不過] profundamente a amiga.
- [伯] Os jornais faziam uma menção discreta à tragédia nas Ilhas Canárias, reforçando a teoria de que a morte da srta. Durrant **havia transtornado** [大過] a cabeça da amiga.
- [羅] În ziare s-au făcut trimiteri discrete la tragedia din Insulele Canare, avansându-se teoria că moartea domnișoarei Durrant o **scosese** [大過] din minți pe prietena ei.
- [英] The papers made discreet references to the tragedy in the Canary Islands, putting forward the theory that the death of Miss Durrant **had unhinged** her friend's brain. (#2533)

(39) のフランス語版で条件法が用いられている理由は、ある説の内容をのべるということから、広義での他者の言説が形成されているからである (4.3 節での議論を参照)。このことはフランス語の特異な点であるといえる。

スペイン語版、ブラジルポルトガル語版、ルーマニア語版では直説法大過去形が用いられている。大過去形使用の理由は、ある推理がなされた、または語られた過去の時点からみて、その推理の対象となる、より遠い過去のできごとを指示しているからである。

イタリア語版では接続法大過去形が用いられているが、この点については、スペイン語版などでみられた時間関係にくわえて、*l'ipotesi* 「仮説」という先行詞がはらんでいる不確実性を表現していると考えられる。

### 5.5. 直説法の未来諸時制に対応する場合

本節では、特徴的な事例として、ブラジルポルトガル語の迂言的未来形に対応する事例に着目したい。

- (40) [仏] Il **aurait pu** [条過] être en train de regarder la jeune fille, bien sûr, à la lumière de la lune, on trébuche.  
[伊] Lui **guardava** [半過] la ragazza, si capisce, e al chiaro di luna si inciampa facilmente.  
[西] **Debía** [半過] de ir mirando a la joven y con la escasa luz de la luna es fácil tropezar con esas cosas.  
[葡] Ele **ia a olhar** [迂未半過] para a rapariga, como é óbvio, e ao luar é fácil tropeçar em coisas.  
[伯] Ele provavelmente **estava** [半過] olhando para a moça, é evidente, e com a luz da lua a gente tropeça nas coisas.  
[羅] Probabil că el **se uita** [半過] la fată, iar la lumina lunii te poți împiedica foarte ușor.  
[英] He **would be looking** at the girl, of course, and when it is moonlight one does trip over things. (#594)

(40) のポルトガルポルトガル語版で迂言的未来形の半過去形が用いられている。動詞 *ir* の半過去形である *ia* は、事行を眺望する視点となる過去時を指示している。迂言的未来形 <*ir*+*a*+不定法> の使用については、「お嬢さんをみながら歩いていたことが原因で、つまづいた」という文内容から考えると、4.5 節でふれた、「マイナス評価を示す」という使用動機があるのではなかろうか。

### 5.6. 接続法に対応する場合

フランス語版の条件法過去形から他のロマンス語での接続法への対応関係としては、接続法過去形、接続法半過去形、接続法大過去形への対応がみられた。

第 1 に、接続法過去形に対応する例をみておこう。

- (41) [仏] Il m'est venu l'idée extravagante que peut-être, je dis bien peut-être, Joan Instow **se serait déguisée** [条過] en diseuse de bonne aventure.  
[伊] Vorrei esporvi una mia pazzesca ipotesi: forse, dico forse, Jean Instow **si è travestita** [複過] da indovina.  
[西] Es solo una fantástica idea que se me ha ocurrido, que Jean Instow **pudo** [単過] haberse disfrazado de adivinadora.  
[葡] É só uma ideia absurda que tive. Pensei que era possível, apenas possível que Jean Instow **se tivesse disfarçado** [接大過] de adivinha.  
[伯] É só uma ideia doida e fantástica minha que possivelmente ... apenas possivelmente ... Jean Instow **tenha se disfarçado** [接過] de cartomante.  
[羅] Este doar o idee fantastic de îndrăzneală din partea mea că poate – doar poate – Jean Instow **să se fi deghizat** [接過] în prezicătoare.  
[英] It's just a wild fantastic idea of mine that possibly—only possibly—Jean Instow **disguised** herself as a fortune-teller. (#2126)

フランス語版では、*idée extravagante* 「異常な考え」という名詞句で指示される考えの内容を明らかにする補足節のなかで条件法過去形が用いられている。条件法が用いられているのはフランス語だけである。ここでは「考え」の異常性が言説の他者性を構成しているのであり、条件法で広義での他者の言説

を標示するというフランス語の特徴があらわれている。

ポルトガル語版では接続法大過去形、ブラジルポルトガル語版、ルーマニア語版では接続法過去形が使われている。これらの叙法・時制は、完了相をフランス語の条件法過去形と共有しているが、接続法という点においてことなっている。これらの言語では、不確実な考えの内容を言いあわす補足節においても、その不確実性ゆえに接続法を用いている。

第2に、接続法半過去形に対応する例をみよう。

(42) [仏] Désireux de se débarrasser de sa femme, il avait promis à Gladys de l'épouser quand elle **serait morte** [条過].

[伊] [...] così dopo la promessa di Jones per cui quando **fosse rimasto** [接大過] vedovo l'avrebbe sposata [...]

[西] Él deseaba librarse de su esposa y prometió a Gladys casarse con ella cuando su mujer **muriese** [接半過].

[葡] Ele queria livrar-se da mulher e prometeu casar-se com Gladys quando a mulher **morresse** [接半過].

[伯] Ele queria tirar a esposa do caminho e prometera casar-se com Gladys quando a esposa **estivesse** [接半過] morta.

[羅] El voia să scape de soția lui și i-a promis lui Gladys că se va căsători cu ea după ce soția lui nu **va mai fi** [vrea 未].

[英] He wanted his wife out of the way and promised to marry Gladys when his wife **was dead**. (#234)

この例のフランス語版では、過去時からみた前未来をあらわす時制的用法の条件法過去形が使われている。それに対して、スペイン語、ポルトガル語、ブラジルポルトガル語では接続法半過去形、イタリア語では接続法大過去形が使われている。これらの言語では、基準点からみて未来方向の時間的従属節のなかで接続法を用いる。またその際、基準点が過去時であるときは接続法半過去形になり、さらにその完了的ヴァリエーションが接続法大過去形である。この例では、「死ぬ」という意味の動詞が用いられているため、語彙的にも完了相であるが、動詞形式も完了相にすることが少なくない(実はイタリア語だけではなく、分類上は接続法半過去形になっているブラジルポルトガル語も、*estivesse morta* と、*morir*「死ぬ」という動詞の過去分詞出身の形容詞が用いられていることから、動詞形式上の完了相に近づいてきている。英語の *was dead* も同様である)。

第3に、接続法大過去形への対応例については、すでに(41)のイタリア語版について言及したところである。それにくわえて、(41)のポルトガル語版をふたたび参照したい。(41)のポルトガル語版では *se tivesse disfarçado* という接続法大過去形が用いられており、ブラジルポルトガル語版の接続法過去形 *tenha se disfarçado* と好対照をなしている。ポルトガルのほうがブラジルより文語的な形式を用いているといえる。

接続法大過去形への対応として言及しておきたいもうひとつの事例は、スペイン語の特異性である。5.2節でみた(35)を以下に(43)として再掲する。(43)ではスペイン語版のみが接続法大過去形を用いている。

(43) [仏] Sans l'homme qui est arrivé avec son bateau, je **me serais noyée** [条過], moi aussi.

[伊] Se non fosse stato per quell'uomo che è arrivato con la barca, credo che **sarei affogata** [条過] anch'io.

[西] De no haber sido por ese hombre que se acercó con el bote, **me hubiera ahogado** [接大過] yo también.

[葡] Se não fosse aquele homem que veio ao nosso encontro de barco, também eu **me teria afogado** [条過].

[伯] Se não fosse por aquele homem ter vindo com o barco, eu **teria me afogado** [条過] também.

[羅] Dacă n-ar fi venit bărbatul acela cu barca, m-aș **fi înecat** [条過] și eu.

[英] If it hadn't been for that man coming out with his boat I **should have been** drowned too. (#2376)

同じところで *me habría ahogado* と条件法過去形で表現することもできるが、ここでスペイン語版が用いているのは、スペイン語に独特の、古式をとどめる語法である。

## 6. おわりに

以上、本発表では、フランス語の条件法現在形・条件法過去形に対応するフランス語以外のロマンス諸語の諸形式について、コーパス調査にもとづいて研究してきた。ロマンス諸語との対照を手がかりとして、フランス語の条件法の意味のひろがりや照らし出すことができたと思われる。

とくに、他のロマンス諸語ではそろって条件法を用いないところで、フランス語のみで条件法を用いている例は数多く、フランス語の条件法使用が独自の論理にもとづいていることが明らかになった。フランス語で条件法が用いられるのは、広い意味での「言説の他者性」がみとめられる場合であり、その際、他のロマンス諸語で対応する形式は直説法であることが多かった。

また、フランス語で条件法の使用が多いことのもうひとつの理由として、ロマンス諸語と比較した場合のフランス語での接続法の使用範囲の狭さ、そして未来諸時制の使用範囲の狭さがあげられる。フランス語では条件文での接続法の使用がほとんどない。そして未来諸時制、とりわけ他の言語では推論用法を広くに有する単純未来形が、現代フランス語では未来時の指示に特化してきており、不確実性の標示は条件法の領分になっている。

こうした点は、コーパスにもとづく対照研究を遂行することによってこそ知ることができるものであり、今後も同様の研究を推進してゆきたい。

### <付録：ラテン語 *amāveram* と *amāvissem* から生まれたロマンス諸語の形式>

(福嶋 2017, p.32 ; 一部改変)

ラテン語	<i>amāveram</i> (直説法大過去形)	<i>amāvissem</i> (接続法大過去形)
フランス語	消失	<i>aimasse</i> (接続法半過去形)
イタリア語	消失	<i>amassi</i> (接続法半過去形)
スペイン語	<i>amara</i> (接続法過去形 <i>ra</i> 形)	<i>amase</i> (接続法過去形 <i>se</i> 形)
ポルトガル語	<i>amara</i> (直説法大過去形)	<i>amasse</i> (接続法過去形)
ガリシア語	<i>amara</i> (直説法大過去形)	<i>amase</i> (接続法過去形)
アストゥリアス語	<i>amara</i> (直説法大過去形・接続法過去形)	消失
アラゴン語	消失	<i>amase</i> (接続法過去形)
カタルーニャ語	消失	<i>amés</i> (接続法過去形)
ルーマニア語	消失	<i>amase</i> (直説法大過去)
レト・ロマン語	消失	<i>amass</i> (条件法現在形)

## 参考文献

- Álvarez Castro, C. (2007) : « Interprétation du futur du l'indicatif et représentation d'événements futurs », *Cahiers Chronos*, 19, pp.7-24.
- Anderson, E. W. (1979) : « The Development of the Romance Future Tense », *Papers in Romance*, 1, pp.21-35.
- Authier-Revuz, J. (1995) : *Ces mots qui ne vont pas de soi, Boucles réflexives et non coïncidences du dire*, 2 vols, Larousse.
- Azzopardi, S. (2011) : *Le Futur et le Conditionnel. Valeur en langue et effets de sens en discours. Analyse contrastive espagnol / français*, Thèse, Université Paul Valéry - Montpellier III.
- Barceló, G. J. (2004 a) : « Guillaume et le futur roman : à propos du futur périphrastique », *Modèles linguistiques*, 25, 1-2, pp.169-178.
- Barceló, G. J. (2004 b) : « L'occitan e lo catalan : doas lengas bessonas ? Un futur compromettent », *Linguistica occitana*, 1, pp.1-12.
- Barceló, G. J. (2004 c) : « Lo(s) futur(s) occitan(s) e la modalitat : elements d'estudi semantic comparatiu », *Linguistica occitana*, 2, pp.1-10.
- Barceló, G. J. (2006) : « Le futur des langues romanes et la modalité : monosémie et dialogisme », *Cahiers de praxématique*, 47, pp.1-10.
- Barceló, G. J. et J. Bres (2006) : *Les temps de l'indicatif en français*, Ophrys.
- Bourova, V. et L. Tasmowski (2007) : « La préhistoire des futurs romans », *Cahiers Chronos*, 19, pp.25-41.
- Buchara, E. (2009) : *Moderna Gramática Portuguesa*, 37ª Edição, Nova Fronteira.
- Cartagena, N. (1999) : « Los tiempos compuestos », I. Bosque et V. Demonte (éds.) : *Gramática descriptiva de la lengua*

- española*, Espasa Calpe, 2, pp.2935-2975.
- Caudal, O. (2012) : « Relations entre temps, aspect, modalité et évidentialité dans le système du français », *Langue française*, 173, pp.115-129.
- Celle, A. (1997) : *Etude contrastive du futur en français et ses réalisations en anglais*, Ophrys.
- Celle, A. (2006) : *Temps et modalité*, Lang.
- Confais, J.-P. (1990) : *Temps, mode, aspect*, Presses Universitaires du Mirail.
- Culioli, A. (1990) : *Pour une linguistique de l'énonciation*, 1, Ophrys.
- Curat, H. (1991) : *Morphologie verbale et référence temporelle en français moderne*, Droz.
- Damourette, J. et E. Pichon (1911-36) : *Des mots à la pensée*, 9 vols, d'Artrey.
- Dahl, Ö (éd.) (2000) : *Tense and aspect in languages of Europe*, Mouton de Gruyter.
- Dendale, P. (1993) : « Le « conditionnel de l'information hypothétique » : marqueur modal ou marqueur évidentiel ? », G. Hilty (éd.) : *Actes du 20ème Congrès International de Linguistique et Philologie Romanes*, Francke, pp.163-176.
- Dendale, P. (2010) : « *Il serait à Paris en ce moment. Serait-il à Paris ?* A propos de deux emplois épistémiques du conditionnel », C. Álvarez Castro et alii (éds.), *Liens linguistiques*, Peter Lang, pp.291-317.
- Dendale, P. (2013) : « Conditionnel, corrélation, incertitude. Quelques réflexions », C. Norén et alii (éds) *Modalité, évidentialité et autres friandises langagières*, Peter Lang, pp.61-79.
- Desclés, J.-P. (1995) : « Les référentiels temporels pour le temps linguistiques », *Modèles linguistiques*, 32, pp.9-36.
- Diller, A.-M. (1977) : « Le conditionnel, marqueur de dérivaison illocutoire », *Semantikos*, 2, 1, pp.1-17.
- Donaire, M. L. (1998) : « La mise en scène du conditionnel ou quand le locuteur reste en coulisse », *Le français moderne*, 66, pp.204-227.
- Fleischman, S. (1982) : *The future in thought and language*, Cambridge University Press.
- Forest, R. (1993) : « « Aller » et l'empathie », *Bulletin de la Société de linguistique de Paris*, 88, pp.1-24.
- Franckel, J.-J. (1984) : « « Futur « simple » et futur « proche » », *Le français dans le monde*, 182, pp.65-70.
- 福嶋教隆 (2017) : 「スペイン語の2つの接続法過去について」『ロマンス語研究』50, pp.31-39.
- Gibo, L. (2017) : « A alternância entre o perfeito e o mais-que-perfeito : metáfora temporal e mudança de ponto de vista », *Bulletin of the Faculty of Foreign Studies*, Sophia University, 52, pp.1-24.
- Gosselin, L. (1996) : *Sémantique de la temporalité en français*, Duculot.
- Gosselin, L. (2005) : *Temporalité et modalité*, Duculot.
- Gosselin, L. (2010) : *Les modalités en français*, Rodopi.
- Gosselin, L. (2018) : « Le conditionnel temporel subjectif et la possibilité prospective », *Langue française*, 200, pp.19-33.
- Grevisse, M. (1993) : *Le bon usage*, 13ème édition, Duculot.
- Guillaume, G. (1970) : *Temps et verbe*, Honoré Champion.
- Hristea, Th. (Ed.) (1984) : *Sinteze de la limba română*, Albatros.
- Imbs, P. (1960) : *L'emploi des temps verbaux en français moderne*, Klincksieck.
- 小林慳 (2006) : 『イタリア語文法ハンドブック』白水社.
- 小林標 (2019) : 『ロマンスという言語』大阪公立大学共同出版会.
- Korzen, H. et H. Nølke (2001) : « Le conditionnel : niveaux de modalisation », P. Dendale et L. Tasmowski (éds.) : *Le conditionnel en français*, Université de Metz, pp.123-146.
- Kronning, H. (2014) : « Pour une linguistique contrastive variationnelle : le conditionnel épistémique d' 'emprunt' en français, en italien et en espagnol », I. Halland et alii (éds.) : *Affaire(s) de grammaire*, Novus Forlag, pp.67-90.
- Laca, B. (2004) : « Les catégories aspectuelles à expression périphrastique : une interprétation des apparentes « lacunes » du français », *Langue française*, 141, pp.85-98.
- Leeman-Bouix, D. (1994, 2002<sup>2</sup>) : *Grammaire du verbe français*, Nathan.
- Ligara, B. (1995) : « La « surmodalisation » dans les traductions françaises des textes littéraires polonaises », Z. Cygal-Krupa (éd.) : *Les Contacts linguistiques franco-polonais*, Presses universitaires de Lille, pp.145-158
- Maingueneau, D. (1999) : *L'Enonciation en linguistique française*, Hachette.
- Martin, R. (1983) : *Pour une logique du sens*, Presses Universitaires de France.
- Martin, R. (1987) : *Langage et croyance*, Margada.
- Martinon, Ph. (1927) : *Comment on parle en français*, Larousse.
- Milner, J. et J.-Cl. Milner (1975) : « Interrogations, reprises, dialogue », J. Kristeva et alii (éds.) : *Langue, discours, société*, Seuil, pp.122-148.
- Morency, P. (2010) : « Enrichissement épistémique du futur », *Cahiers Chronos*, 22, pp.197-214.
- Morency, P. et L. de Saussure (2006) : « Remarques sur l'usage interprétatif putatif du futur », *Travaux neuchâtelois de linguistique*, 45, pp.43-70.
- Nef, F. (1986) : *Sémantique de la référence temporelle en français moderne*, Peter Lang.
- Novakova, I. (2001) : *Sémantique du futur*, L'Harmattan.
- Pană Dindelegan, G. (2013) : *The Grammar of Romanian*, Oxford University Press.

- Patard, A. (2017) : « Du conditionnel comme constructions ou la polysémie du conditionnel », *Langue française*, 194, pp.105-124.
- Popescu, M. (2015) : « Le 'futur épistémique inférentiel' dans les langues romanes », *Revue de Sémantique et Pragmatique*, 38, pp.59-75.
- Popescu, Ș. (1984) : *Gramatică practică a limbii române*, Editura didactică și pedagogică.
- dos Prazeres Costa, A. L. (2006) : « Mudança no sistema verbal do português: as variants do futuro do pretérito e a questão da gramaticalização », *Niterói*, 21, pp.87-100.
- Rocci, A. (2000) : « L'interprétation épistémique du futur en italien et en français », *Cahiers de linguistique française*, 22, pp.241-274.
- Rohlf, G. (1966-1969) : *Grammatica storica della lingua italiana e dei suoi dialetti*, 3 vols, Giulio Einaudi.
- Rotgé, W. (1995) : « Temps et modalité », *Modèles linguistiques*, 31, pp.111-129.
- 坂本鉄男 (2009) : 『現代イタリア文法・新装版』白水社.
- Schogt, H. G. (1968) : *Le système verbal du français contemporain*, Mouton.
- Squartini, M. (2001 a) : « Futuro e condizionale nel discorso riportato », G. L. Beccaria et C. Marelli (éds.) : *La parola al testo*, Edizioni dell'Orso, pp.451-462.
- Squartini, M. (2001 b) : « The internal structure of evidentiality in Romance », *Studies in Language*, 25, 2, pp.297-334.
- Squartini, M. (2004) : « Il Futuro e il Condizionale nelle lingue romanze », *Revue Romane*, 39, 1, pp.68-96.
- Squartini, M. (2008) : « Lexical vs. grammatical evidentiality in French and Italian », *Linguistics*, 46, 5, pp.917-947.
- Stage, L. (2002) : « Les modalités épistémique et déontique dans les énoncés au futur (simple et composé) », *Revue Romane*, 37, 1, pp.44-66.
- Stage, L. (2003) : « Les valeurs modales du futur et du présent », M. Birkelund et elii (éds.) *Aspects de la modalité*, Niemeyer, pp.203-216.
- Sthioul, B. (1998) : « Temps verbaux et point de vue », J. Moeschler (dir.) : *Les temps de l'événement*, Kimé, pp.197-220.
- Sten, H. (1952) : *Les temps du verbe fini (indicatif) en français moderne*, Munksgaard.
- Timoc-Bardy, R. (2013) : « Le roumain : une langue « sans concordance des temps » ? », *Langages*, 191, pp.53-66.
- Togoby, K. (1953) : *Mode, aspect et temps en espagnol*, Munksgaard.
- Togoby, K. (1985) : *Grammaire française*, 5 vols, Akademisk Forlag.
- Touratier, Chr. (1996) : *Le système verbal français*, Colin.
- 上田博人 (2011) : 『スペイン語文法ハンドブック』研究社.
- Vatrican, A. (2015) : « *Ne saurait* en français : opérateur modal épistémique », *Modèle linguistique*, 71, pp.61-75
- Vet, C. (2003) : « Attitude, vérité et grammaticalisation : le cas du futur simple », M. Birkelund et elii (éds.) *Aspects de la modalité*, Niemeyer, pp.229-239.
- Vet, C. et Kampers-Manhe (2001) : « Futur simple et futur du passé : leurs emplois temporels et modaux », P. Dendale et L. Tasmowski (éds.) : *Le conditionnel en français*, Université de Metz, pp.89-104.
- Vetters, C. (2001) : « Le conditionnel : ultérieur du non-actuel », P. Dendale et L. Tasmowski (éds.) : *Le conditionnel en français*, Université de Metz, pp.169-207.
- Vlad, D. (2004) : « Équivalents roumains du conditionnel français », *Studia universitatis Babeş-Bolyai –Philologia*, 49, 3, <https://uoradea.academia.edu/DacianaVlad>
- 渡邊淳也 (1998) : 「他者の言説をあらわす条件法について」『筑波大学フランス語・フランス文学論集』13, pp.109-155.
- Watanabe, J. (2001) : « Le conditionnel du « discours d'autrui » », *Etudes de langue et de littérature françaises*, 78, pp. 216-230.
- 渡邊淳也 (2004) : 『フランス語における証拠性の意味論』早美出版社.
- 渡邊淳也 (2006) : 「フランス語の「丁寧の半過去」と日本語の「よろしかったでしょうか」型語法との対照研究」『文藝言語研究 言語篇』筑波大学, 50, pp.41-84.
- 渡邊淳也 (2007 a) : 「フランス語の「丁寧の半過去」と日本語の「よろしかったでしょうか」型語法」『フランス語学研究』41, pp.54-59.
- 渡邊淳也 (2007 b) : 「間一髪の半過去をめぐって」『文藝言語研究 言語篇』筑波大学, 52, pp.151-175.
- 渡邊淳也 (2008) : 「分岐的時間の表象を用いた時制・モダリティの連関の説明の試み」『文藝言語研究 言語篇』筑波大学, 54, pp.15-44.
- 渡邊淳也 (2009 a) : 「時制とモダリティの連関への新たな接近法」『フランス語学研究』43, pp.77-83.
- 渡邊淳也 (2009 b) : 「フランス語およびロマンス諸語における単純未来形の総合化・文法化について」『文藝言語研究 言語篇』筑波大学, 55, pp.123-144.
- 渡邊淳也 (2010) : 「拘束的用法の *devoir*, *falloir* の否定の多義性について」『文藝言語研究 言語篇』筑波大学, 57, pp.25-41.
- 渡邊淳也 (2011) : 「ジェロンディフと現在分詞について」『文藝言語研究 言語篇』筑波大学, 60, pp.121-181.
- 渡邊淳也 (2012) : 「叙想的時制と叙想的アスペクト」『文藝言語研究 言語篇』筑波大学, 61, pp.191- 234.

- 渡邊淳也 (2013 a): 「単純未来形と迂言的未来形について」『文藝言語研究 言語篇』筑波大学, 62, pp.69-106.
- 渡邊淳也 (2013 b): 「主語不一致ジェロンディフについて」『文藝言語研究 言語篇』筑波大学, 63, pp.95-178.
- 渡邊淳也 (2014 a): 『フランス語の時制とモダリティ』早美出版社.
- 渡邊淳也 (2014 b): 「叙想的時制、叙想的アスペクトと認知モード」春木仁孝・東郷雄二 (編)『フランス語学の最前線』2, ひつじ書房, pp.177-213.
- 渡邊淳也 (2014 c): 「前未来形のモダールな用法について」『文藝言語研究 言語篇』筑波大学, 66, pp.35-56.
- 渡邊淳也 (2015 a): 「主語不一致ジェロンディフと認知モード」『フランス語フランス文学研究』日本フランス語フランス文学会, 107, pp.155-169.
- Watanabe, J. (2015 b): « G erondif non-cor eferentiel », *Voix plurielles*, 12, 1, pp.207-224.
- 渡邊淳也 (2017 a): 『コルシカ語基本文法』早美出版社.
- 渡邊淳也 (2017 b): 「フランス語および西ロマンス諸語における「行く」型移動動詞の文法化について」早瀬尚子・天野みどり (編)『構文と意味の拡がり』くろしお出版, pp.223-245.
- 渡邊淳也 (2018 a): 『叙法の謎を解く』白水社.
- 渡邊淳也 (2018 b): 「フランス語大過去形の特徴的用法について」『筑波大学フランス語フランス文学論集』33, pp.81-112.
- 渡邊淳也 (2019 a): 「フランス語の単純未来形と条件法―叙法的対立とその源泉―」『言語・情報・テキスト』東京大学, 26, pp.63-78.
- 渡邊淳也 (2019 b): 「フランス語の条件法現在形・条件法過去形とロマンス諸語における対応形式の対照研究」『筑波大学フランス語フランス文学論集』34, pp.57-90.
- 渡邊淳也 (2021): 「フランス語半過去形と叙想的時制・叙想的アスペクト」益岡隆志監修『[研究プロジェクト] 時間と言語』ひつじ書房, pp.261-289.
- 渡邊淳也 (2022 a): 「分岐的時間のモデルからみたフランス語の法動詞」和田尚明・渡邊淳也編『時制・アスペクト・モダリティ・視点と状況把握・状況報告』TAME研究会, pp.103-121.
- 渡邊淳也 (2022 b): 「フランス語とコルシカ語における条件法の対照研究」『発話言語学研究』1, pp.40-62.
- 渡邊淳也 (  para tre): 「フランス語とコルシカ語における未来諸時制の対照研究」『ロマンス語研究』日本ロマンス語学会, 56 (2023年5月刊行予定).
- 渡邊淳也・小川紋奈 (2018): 「フランス語の単純未来形・前未来形とロマンス諸語における対応形式の対照研究」渡邊淳也・和田尚明 (編): 『諸言語における TAME の発現について』筑波大学 TAME 研究会, pp.59-82.
- 渡邊淳也・佐多明理 (2022): 「フランス語の接続法とポリフォニー」廣瀬幸生ほか編『比較・対照言語研究の新たな展開』開拓社, pp.211-236.
- Weinrich, H. (1964): *Tempus*, Kohlhammer.
- Wilmet, M. (1976): *Etudes de morpho-syntaxe verbale*, Klincksieck.
- Wilmet, M. (1997): *Grammaire critique du fran ais*, Hachette.
- 山村ひろみ (2020): 「スペイン語の「未来」と「過去未来」: その機能的類似点と相違点について」『言語文化論究』九州大学, 44, pp.11-26,
- Yamamura, H. (2021): « Los usos del futuro en espa ol y sus funciones », *Studies in Languages and Cultures*, 46, pp.17-31.
- Yvon, H. (1952): « Faut-il distinguer deux conditionnels dans le verbe fran ais? », *Le fran ais moderne*, 20, pp.249-265.